

# 窮地を

サッカーを育み

—— 国士館に生きて

—— 大澤英雄伝

故大澤英雄元理事長  
追悼本刊行委員会編

# 楽しむ



学校法人 国士館

Kokushikan

## はじめに



学校法人国士館  
理事長 瀬野 隆

故大澤英雄理事長は、2024（令和6）年春より体調を崩され、療養中と  
なられた。この間、学校法人国士館の理事会を担う私たちは、理事長の指示を  
受けながら学園を運営し、理事長の1日も早い回復を信じた。

しかしながら、2025年2月16日、大澤理事長は89歳で他界された。国  
士館にとっては、まさに「青天の霹靂」「巨星、墜つ」の日であった。理事  
長代行を拝命していた私は、「どんな仕事でもお受けしますが、大澤先生は  
生きていてください」と申し上げていた。

大澤英雄先生は、1956（昭和31）年に国士館に入学されてから、今日まで  
の約70年間、本学園に籍を置かれた。幕末の西洋列強によるアジア植民地  
化に対抗し、日本の「自主独立」と「アイデンティティの確立」に奔走し  
た吉田松陰が遺そうとした「大和魂」を、後世に受け継ぐ教育機関として、  
松陰祠畔に本学の礎を設けた柴田徳次郎先生の意を継承する代表的な人物  
が、大澤先生である。国士館大学体育学部の第1期生であり、その誇りと責  
任を持っておられた。戦後の激動と混迷の時代に、柴田徳次郎先生の精神を  
受け継いで形成された「誠意・勤労・見識・気魄」の国士館魂を建学の精神  
として堅持され、「スポーツ立国たる日本」「武道・スポーツの国士館」達成  
のための獅子奮迅の生涯であった。

はじめに

大澤先生が歩まれた体育学部学部長、大学学長、さらに学校法人国士館の理事長としての学内における業績の一端を、時系列に列挙すると次のようである。

1992（平成4）年の体育学部の多摩キャンパス移転をはじめ、2000年には同キャンパスで体育学部に武道学科とスポーツ医科学科を新設した。2002年に町田キャンパスで21世紀アジア学部21世紀アジア学科を新設、2008年には体育学部にこどもスポーツ教育学科を新設した。また、旧明正高等学校跡地の取得で2008年に世田谷キャンパスに梅ヶ丘校舎を新設、これによって鶴川キャンパスの政経・法・文学部の教養課程は世田谷キャンパスに回帰した。さらに2010年までに全学部の上に位置する大学院各研究科を世田谷・町田・多摩キャンパスで設けた。2011年の東日本大震災後には、国士館大学防災・救急救助総合研究所の開設と防災・ボランティア活動を推し進め、2012年には福岡県太宰府市の太宰府キャンパスを閉鎖した。2012年には世田谷キャンパスにメイプルセンチュリーホール（MCH）を建設、2016年には多摩キャンパスにメイプルセンチュリーセンター多摩（MCCT）を建設した。次いで2017年の国士館創立100周年記念事業と創立記念式典の挙行、そして2018年の三笠宮彬子女王殿下への名誉博士号授与および人文科学研究科客員教授就任を行った。2019年には多摩丘陵病院との協力協定締結と学生・生徒・教職員の医療補助を、2020年のコロナ・パンデミック時には学生・生徒・教職員全員の安全確保に努めながら、修学支援・遠隔授業・ワクチン職域接種を実施し、あわせて町田市野津田町に国士館楓の杜キャンパスを新設した。2022年には多摩キャンパス近くに位置する多摩南野キャンパスの新設ならびに大学での副専攻制導入とデータサイエンス教育研究開発センターの開設を実施した。

特に、1999年に国士館大学スポーツ協議会を発足、2018年には国士館スポーツプロモーションセンター（KSPC）を開設して、そのもとで大学全学部にスポーツ推薦制度を拡充・整備した。大学に34クラブ、所属学生約

1,800人という現数値が示すように「武道・スポーツの国士館」を定着させ、国士館の「スポーツ」と「防災」という2つの特徴を形成した。こうして国士館からこれまでにオリンピック69人が誕生し、金メダル6個、銀メダル2個、銅メダル4個を獲得する選手を輩出した。大学・高等学校・中学校においては、男子・女子の剣道・柔道・空手道部の活躍、東都大学野球リーグでの硬式野球部の奮闘、さらには箱根駅伝や甲子園などへの出場・健闘もその成果である。この背景には、山田慎吾、福本正幸、美納淳一（いずれも現、常任理事）ら職員の献身があった。

学外からの評価は、2019年の日本国政府からの旭日中綬章受章と、2023年の日本サッカー協会からのサッカー殿堂入りが、大澤先生の功績を何よりも明瞭に示している。

大澤先生は、国士館の発展と日本におけるサッカーというスポーツ競技の発展とその基盤整備のために尽力されてきた。大学教授としての大澤先生は、成長期の青少年における心身のバランスのとれた人間形成にとって、スポーツがいかに有効であるかを熟知されていた。また、健常者だけでなく障がい者にも、学校教育におけるスポーツがいかに重要であるかも主張された。そして、サッカーのようなスポーツ競技の国際化が、世界の平和の維持にも重要な役割を持っているという信念と志は、一貫して持っておられた。

1990年頃、私と大澤先生は、体育学部の多摩キャンパスへの移転問題を機に、「真っ当な学園・国士館」にするための条件について、2人で胸襟を開いて心底から話し合った。大澤先生は1992年から体育学部学部長に、私は1995年から政経学部学部長に就任する前のことである。当時、18歳人口は200万人を超え、大学進学者が急増し、本学の世田谷キャンパスも学生であふれた臨時的定員増の時期である。最終的に体育学部の多摩移転が決定するが、この時の学部移転の条件は、安定した学生確保のための魅力ある新学科の設置と体育学部の各クラブ活動に十分な施設・グラウンドの整備であった。

はじめに

しかし、それに必要な財政面において、他学部からの反対は強かった。当時、政経学部内では既設の政治学研究科・経済学研究科に加えて、経営学科における大学院研究科の新設を要望していたし、体育学部や文学部の各学科でも研究科の新設を強く主張していた。その後の大学のユニバーサル化が予測されるなか、大学院の拡充・整備の必要性は理解できた。しかし、狭小な世田谷キャンパスでは、全学部・学科の上に位置付く大学院各研究科の新設は設置基準に照らして困難であり、学内外ともに調整も進展せず悩んでいた。私たち2人はピンチに直面していたのである。そこで、1992年の体育学部の多摩キャンパス移転と、1997年の政経学部経営学科での経営学研究科の新設に向けて、これらに賛成し、最後まで実現に協力することについて、2人で合意した。

学園の経営者としての大澤先生は、「いつ何どきでも、ピンチはある。この時でなければ、できないことがある。それを実現するためには、ピンチはチャンスである」と言われていた。この言葉は忘れることができない。学内を揺るがした、体育学部多摩移転と経営学研究科新設の二大懸案事項はその後に達成された。それはクラブ活動問題の処理にも活かされた。

スポーツ指導者としての大澤先生は、プレーヤーであるときも、コーチ・監督であるときも、大澤流の「勝利至上主義」を強調された。「スポーツは勝つためにある。そうでなければ競技として、人々に関心も共感も感動も与えられない。すぐに飽きられ、誰も真剣にこれを続けようとは思わない。だから、プレーヤーとチームは勝たねばならない」のである。しかし、偶然の僥倖<sup>きようこう</sup>、無力な相手、敵失による勝利は、本当の勝利ではない。個々の選手がその持てる潜在的能力のすべてを競技場に出し切り、監督やコーチら指導者がプレーヤーの持てる力のすべてを引き出す指揮ができた時が、本当の勝利である。「国士館は勝つのだ。勝つべくして勝つのだ。それこそが国士館のたくましい勝ち方だ」の一言。静かな気魄を帯びた言葉は、聞く者の心にずっしりと響く。

ひとりの人間としての大澤先生は、徹底した思いやりの人であった。誰にも知られない厳しい自己抑制・自己犠牲・自己責任がそこにはあった。一人ひとりを人として尊重し、人の意見を自分の意見とし、自分が責任を取ることによって、人を安堵させ、人にその成果を与えようとする「いぶし銀」のような人であった。全サッカー部員の名前と彼らの家庭環境のすべてを知ろうとされていた。

公私ともに親しくさせていただいた大澤家のご家族は、大澤先生を次のように評された。

「やろうと決めたことは、何があってもブレずに、責任をとる強い覚悟で、今までやって来ました。嬉しいことも沢山あったと思いますが、理不尽な悔しいこともあったと思います。それでも“窮地を楽しむ”精神で、乗り越えてきたタフな人生は、家族ながら凄いとします」  
確かに、そうした人でなければ、そして大澤家の方々が総力をもってこの人を愛し、信じ、サポートされていなかったならば、これほど多方面における大事業を実現することはできなかったであろう。

国士館にとって、大澤先生を失った時、いわば「北極星なき航海」とも言える茫然自失の状況下に置かれた。しかし、大澤先生は生前、次の国士館100年に向けた新事業を策定され、残る私たちが「航路」を迷わないよう、なすべき事業とその配慮もされた。

それは、国士館創立110周年記念事業として進める次世代の「国士館キャンパス環境整備計画」である。今後の約10年を3つのフェーズに区分して実現させる長期の一大事業である。学園の拡大型にその都度建設されてきた世田谷キャンパスの各校舎は50余年を経ており、それら校舎5棟の建て替えと新校舎1棟の建設、および中学校の独立棟整備を中心とする総合環境整備事業である。

この事業の目的は、大澤先生が目指しておられた面倒見の良い学園、すなわち学生・生徒と教職員が快適な修学とその支援を可能にするような最適な

はじめに

環境づくりにある。それは、学生・生徒の「動線」を計画的に配慮し、「居心地の良い居場所」“WELL-BEING SCHOOL KOKUSHIKAN”を実現することにある。また、地域との連携・社会貢献を重視した「防災拠点としての避難地」を強化することでもある。

現在、我が国は、1992年の18歳人口のピーク205万人であったものが、2040年にはその43%の88万人になるとも予測されている。この困難な時代を乗り切るためには、国士館キャンパス環境整備事業は必要不可欠である。「第二の建学」となる環境整備計画の実現にまい進することが、大澤先生から課せられた私たちの使命である。

2025年2月17日、大澤先生は、主治医で本学の島崎修次客員教授や田中秀治教授をはじめ多くの病院関係者に見送られて、多摩丘陵病院を出られた。そして、多摩キャンパスで体育学部の関係者に迎えられ、また町田キャンパス・国士館楓の杜キャンパスを経て、自宅へと戻られた。

大澤先生が生前に愛されていた「青」。故郷・函館の空と海の色でもある大澤ブルーは、2月22日の告別式の時も、明治維新に縁深い歴史遺産の街・世田谷の空も地も、その一色で染めた。「真っ当にして勝つ」ことに執念を燃やされた故大澤先生の告別式は、世田谷キャンパスに隣接する青龍山勝國寺で、高岡精司住職（現、本学評議員）の読経のもと、しめやかに執り行われた。参列をいただいた日本私立大学協会の小原芳明会長（玉川学園長）をはじめ同協会小出秀文事務局長の献花、全国体育スポーツ系大学協議会の松浪健四郎会長（日本体育大学理事長）、日本サッカー協会の川淵三郎相談役、佐藤圭一学長・福本正幸常任理事の弔辞、次期学長で体育学部教授の田原淳子常任理事などの教職員や、自ら育てられた山本昌邦氏・柱谷幸一氏・柱谷哲二氏・宮澤ミシェル氏らのサッカー関係者など、約1,500人の弔意に包まれた。大澤先生を乗せた車が永久の別れのために世田谷キャンパス正面に入ると、大学サッカー部の学生たちによる大澤エールの声、ブルースカイを突き抜けた。建学の森や国士館大講堂に轟き、松陰神社の楓林にも、豪

徳寺の空にも響き渡った。

本書は、創立者柴田徳次郎先生の警咳<sup>けいがい</sup>に接せられた大澤先生に対し、国士館の約20万人の卒業生、約1万3,500余人の学生・生徒、約1,000人の教職員が追悼の意を示すものであり、また「永遠に生きていただきたい」という熱い思いから上梓するものである。

本書の刊行にあたり、奥様のヤエ様とご息女志保子様からは、その趣旨へのご賛同とご協力をいただいた。また本書の執筆には、生前に特段のご交誼をたまわった学園内外の皆様から、故人との貴重で得がたいエピソードを頂戴した。今後の国士館人が、また私立学校の関係者が、さらにスポーツ各界の関係者の方々が、本書をご高覧いただくことを期し、深甚なる謝意を表する。

瀬野 隆（せの・たかし）

略歴 1944年京都府生まれ。1967年3月国士館大学政経学部卒業、1972年3月同大学院経済学研究科博士課程修了。1972年国士館大学助手、1975年政経学部二部講師、1986年政経学部二部教授、1996年4月政経学部学部長、1997年12月教務部長、2002年4月学長室長などを歴任し、2015年6月国士館大学名誉教授。2003年5月学校法人国士館常任理事・評議員、2025年2月学校法人国士館理事長に就任、現職。2005年博士（経済学）（国士館大学）。

## 目次

はじめに ..... 学校法人国士館理事長 瀬野 隆 i

### 第1章 北海道時代 ..... 1

- 第1節 北海道に誕生 ..... 3  
生誕／父の死／少年時代
- 第2節 サッカーに出会う ..... 8  
中央中学校・函館有斗高等学校／函館税関を辞す
- 第3節 上京 ..... 13  
勘違いで／決意は固く／国士館短期大学

### 第2章 学生時代 ..... 19

- 第1節 国士館短期大学に入学 ..... 21  
国士館の状況／短期大学体育科の増設／授業と学生生活／臨海実習
- 第2節 サッカー部の創部 ..... 28  
2人からスタート／部員集め／岡部平太との出会い
- 第3節 国士館大学への転入と遅れた卒業 ..... 35  
大学の創設と体育学部／大学の教員陣／卒業を控えて／卒業遅延の事情

## 回想

- ある同期生の学生時代 ..... 間瀬誠吾 43
- 体育学部の黎明期と剣道部再建 ..... 脇本三千雄 49

**第3章 大学助手～講師の時代** ..... 55

- 第1節 球技研究室 ..... 57  
教育者としての第一歩／結婚・家庭を持つ／薄給の助手時代／球技研究室
- 第2節 国士館総合学園への歩み ..... 64  
国士館大学の発展／教育環境の整備
- 第3節 サッカー中心の生活と少年育成 ..... 73  
自費の借上げ寮／サッカー部の草創期／少年育成への取り組み／百合丘子どもサッカークラブ／指導理論を欧州に学ぶ

**回想**

- ともにサッカー人生を歩んで ..... 南谷光一 87
- 大澤先生と体育学部を支えて ..... 堀江健二 93
- サッカーとの出会い ..... 大倉 智 100

**第4章 大学助教授時代** ..... 107

- 第1節 大学助教授に昇格 ..... 109  
助教授となって／大学同窓会の発足／創立者の顕彰活動
- 第2節 小学生年代の育成に取り組む ..... 117  
全日本少年サッカー大会の立ち上げ／全日本少年サッカー大会の改革
- 第3節 大学サッカー部の強化 ..... 122  
大学サッカーの各大会／スカウト活動と1部初昇格／初優勝は総理大臣杯

**回想**

- 国士館の「魂」を大澤先生に学んで ..... 小山泰文 130
- 小学生年代育成への功績 ..... 綾部美知枝 135
- 尊敬の念を込めて ..... 山本昌邦 140

**第5章 大学教授時代** ..... 147

- 第1節 大学教授となって ..... 149  
教授昇格／小野路・多摩校地の開設
- 第2節 大学サッカー部の3冠達成 ..... 152  
念願の1部リーグ初優勝／大学サッカー3冠／初の女子部員
- 第3節 サッカー部の体制整備 ..... 163  
コーチの陣容／指導法の特徴／チームの方針

**回想**

- サッカー界のパイオニアとして ..... 柱谷幸一 169
- 熱く、心ある指導者の一面 ..... 西澤浩一 176
- 大澤イズム ..... 柱谷哲二 183
- 人生を変えたサッカーの恩師 ..... 宮澤ミシェル 189
- 女子サッカーへのリスペクト ..... 本田美登里 195

**第6章 体育学部長時代** ..... 201

- 第1節 体育学部の多摩移転 ..... 203  
多摩移転計画／多摩キャンパス整備と授業開始／体育学部長となって
- 第2節 Jリーグ開幕とJFL参入 ..... 210  
Jリーグの開幕と大学サッカー／JFLに参入／日韓ワールドカップ／Iリーグの創設
- 第3節 体育学部を3学科に ..... 221  
「産みの苦しみ」／新設2学科の特徴／多摩キャンパスの充実

**回想**

- 国士館の発展を支えた多摩移転 ..... 渡辺 剛 227
- 大澤先生の「器」を想う ..... 永井秀樹 232
- 体育学部スポーツ医科学科創設期から現在まで ..... 山口嘉和 238
- 大澤英雄先生思い出の記（あのころあのとき） ..... 福本正幸 243

**第7章 大学学長時代** ..... 251

- 第1節 大学学長に就任 ..... 253  
学長に推されて／学長として
- 第2節 大学サッカー部事件 ..... 259  
事件発生とその対応／国土館の処分と責任／サッカー界での処分と責任／その後、固い決意
- 第3節 大学学長として ..... 265  
大学認証評価への対応／こどもスポーツ教育学科の新設／教育組織の再編

**回想**

- 大澤さんを偲んで ..... 川淵三郎 272  
こどもスポーツ教育学科の創設期 ..... 田原淳子 278

**第8章 理事長時代その1** ..... 285

- 第1節 理事長に就任 ..... 287  
副理事長から理事長へ／梅ヶ丘校舎の完成／教育・研究体制の整備
- 第2節 大学サッカー部との関わりかた ..... 293  
学生に請われて／テクニカルアドバイザー
- 第3節 国土館創立100周年に向けた方策 ..... 297  
方針「面倒見の良い大学」／防災総研の設置と防災教育／諸施設の整備／記念事業／創立100周年記念式典

**回想**

- 大澤流の学校経営と人間力 ..... 今福康夫 312  
憧れ、ライバル、畏敬、継承 ..... 中野雄二 317  
大学サッカー部のキャプテンとして ..... 石川喬穂 323  
日本サッカーの礎と未来 ..... 田嶋幸三 330  
大澤英雄先生を偲んで ..... 小原芳明 336

**第9章 理事長時代その2** ..... 341

- 第1節 国土館発展の方策 ..... 343  
コロナへの対応／国土館楓の杜キャンパスの開設／多摩南野キャンパスの開設
- 第2節 大学スポーツ改革を目指して ..... 353  
UNIVAS／UNIVAS資料に見る信念
- 第3節 受章・殿堂入り・闘病 ..... 358  
旭日中綬章を受章／サッカー殿堂入り／闘病／葬儀
- 第4節 受け継がれるもの ..... 371  
学生に資格を／大学サッカー／新キャンパス環境整備計画

**回想**

- 「最優先にすべきは、学生・ご家族の命を守るための感染防止策の徹底だ！」  
—— 猖獗のコロナ禍と対峙した“チーム国土館”奮闘記 —— ..... 佐藤圭一 380
- 大澤英雄と大学スポーツ ..... 入澤 充 385  
人のつながりと愛情に触れて ..... 佐々木 洋 390  
楓の葉が語る ..... 松浪健四郎 395  
最後の教えを受け継いで ..... 美納淳一 400  
日本サッカー界のこれから ..... 森保 一 407

- 大澤英雄 関連年表 ..... 413  
大澤英雄 研究業績等一覧 ..... 423  
大澤英雄 葬儀・告別式弔辞 ..... 425  
国土館大学サッカー部関連戦績一覧 ..... 430  
参考文献 ..... 437  
刊行委員会／協力／執筆関係者 ..... 439  
編集後記 ..... 440

第1章

北海道時代



## 第1節 北海道に誕生

### 生 誕

大澤英雄は、1936（昭和11）年1月22日、北海道函館市に生まれた。父慶太郎、母イトの両親に、兄2人、姉2人の5人兄弟の末っ子であった。父慶太郎は、函館市役所で土木関連の部署に勤務する公務員であったが、終戦前に市役所を退職して土建会社を設立した。戦争中に破壊された道路や各施設を再建する仕事で、その経営は順調であった。父は、仕事の量も多く、毎晩遅くに疲れた顔で帰宅していた。

他の家庭よりは少し裕福であったが、戦争の影響で日本全土が貧しかった時代である。空き地にキャベツや大根、白菜、ジャガイモなどを育てて、自給自足を余儀なくした時代でもある。各家庭、野菜を育てて管理するのは子どもたちの仕事で、大澤家も例外ではなかった。野菜の種をまいて、芽が出て、少しずつ大きくなって、収穫するまで成長する。この単純作業は好きではなかったが、この過程を観察するのは密かな楽しみであった。隣の空き地の野菜と成長の度合いを競うことが好きであった。大澤少年が真心込めて育てた野菜は、近所の子どもたちが育てた野菜より丈夫で、大きくて美味しかったという。

「かけっこ」は速かった。父は、函館市立柏野小学校で行われる運動会を楽しみにしていた。また、街の子ども相撲大会にも、父は応援に来てくれた。競技は何であれ「1番」を取ることが多かった。2位になった時には、大澤自身も悔しかったが、父の怒りといえば中途半端なものではなかった。

「いま一度、私の成長に関わっていただいたすべての方、すべての出会いに感謝の気持ちを伝えたい。」

（「サッカー人生70年」『日刊スポーツ』2023年9月9日）

## 大澤英雄 研究業績等一覧

### ○論文等

- 二ツ森修・東信義・大澤英雄「運動選手の皮下脂肪厚に関する研究」『体育学研究』第9巻第1号（日本体育学会、1964年）
- 菅原克夫・大澤英雄・高橋華王「サッカー選手の身体位置と代償性眼転位の研究について」『体育学研究』第10巻第2号（日本体育学会、1965年）
- 大澤英雄・橋本豊司・十枝内功・二ツ森修「軍人とスポーツ（そのⅠ）：オリンピック東京大会参加選手職業分析」『体育学研究』第10巻第2号（日本体育学会、1965年）
- 十枝内功・坂井正郎・石田啓・橋本豊司・大澤英雄・二ツ森修・大久達雄「高校運動部指導上の問題に関する研究」『体育学研究』第11巻第5号（日本体育学会、1966年）
- 橋本豊司・坂井正郎・石田啓・大澤英雄・十枝田功・二ツ森修・大久達男「高校運動部集団にみられる脱落者の原因に関する研究」『体育学研究』第11巻第5号（日本体育学会、1966年）
- 二ツ森修・石田啓・坂井正郎・大澤英雄・橋本豊司・十枝内功・大久達雄・南谷光一・大木明生「高校運動部指導上の問題に関する研究」『体育学研究』第11巻第5号（日本体育学会、1967年）
- 二ツ森修・石田啓・坂井正郎・大澤英雄・橋本豊司・十枝内功・大久達雄・南谷光一・大木明生「高校運動部指導上の問題に関する研究 そのⅡ 両立について」『体育学研究』第12巻第5号（日本体育学会、1968年）
- 田中純二・浪越信夫・久保田洋一・多和健雄・大澤英雄・竹腰重丸「サッカー・スポーツ少年団に関する調査研究（その1）」『体育学研究』第14巻第5号（日本体育学会、1969年）
- 二ツ森修・大澤英雄・橋本豊司「高校運動部集団における指導者の立場から見た退部者の原因に関する研究」『体育学研究』第15巻第5号（日本体育学会、1970年）
- 大澤英雄・橋本豊司・二ツ森修・大久達男「高校運動部脱落者の問題について（そのⅢ）」『体育学研究』第15巻第5号（日本体育学会、1970年）
- 橋本豊司・大澤英雄・吉田久士・伴勇資・二ツ森修「高校運動部指導上の問題について：体育方法（指導）に関する研究」『体育学研究』第24巻日本体育学会大会号（日本体育学会、1974年）

大澤英雄 研究業績等一覧

細田三二・石田啓・橋本豊司・ニッ森修・吉田久二・前山定・大澤英雄「少年におけるサッカーの知識の理解度について」『体育学研究』第30巻日本体育学会大会号（日本体育学会、1979年）

松本光弘・小宮喜久・森岡理右・斉藤照夫・大澤英雄・久保田洋一・宇野勝・山中邦夫・西島尚彦・中山雅雄「サッカー上達時期に関する研究」『体育学研究』第30B巻日本体育学会大会号（日本体育学会、1988年）

吉田久士・細田三二・大澤英雄「ハンドボール選手の心理的競技能力における特性」『国士舘大学体育研究所報』第16巻（国士舘大学体育学部附属体育研究所、1998年）

細田三二・中屋敷眞・吉田久士・大澤英雄「大学サッカー選手の競技力に関連する運動機能の特性 ―大学選抜候補選手と国士舘大学選手との比較―」『国士舘大学体育研究所報』第16巻（国士舘大学体育学部附属体育研究所、1998年）

○書籍等

大澤英雄監修『サッカー・ベスト・マニュアル：キミのセンスを正しく伸ばす（ナガオカ入門シリーズ）』（永岡書店、1985年）

大澤英雄監修『小学生のサッカー（小学生シリーズ）』（新星出版社、1986年）

大澤英雄監修『小学生のサッカー 練習編（小学生シリーズ）』（新星出版社、1986年）

大澤英雄監修『小学生のサッカー ゲーム編（小学生シリーズ）』（新星出版社、1986年）

大澤英雄監修『絵でわかるサッカー 名選手になるための基本技術』（新星出版社、1987年）

大澤英雄監修『絵でわかるサッカー上達法 技術と練習法』（新星出版社、1987年）

田中純二・大澤英雄著『コーチと両親のための少年サッカー 指導13章と戦術感覚入門』（梓出版社、1989年）

『日本サッカーがワールドカップで勝つ日 山本昌邦・綾部美知枝・布啓一郎・大澤英雄が斬る（スポーツ・システム講座5）』（国士舘大学体育・スポーツ科学学会・アイオーエム、2004年）

## 参考文献

- 『サッカーマガジン』（ベースボール・マガジン社、1966年6月～各号）
- 『サッカー／The Soccer』（日本蹴球協会、1970～1974年各号）
- 『日本サッカーのあゆみ（日本蹴球協会創立50年史）』（日本蹴球協会、1974年2月）
- 川村利広『サッカー伯楽見目正基伝』（私家版、エム・ビー・シー 21、1988年4月）
- 『関東大学サッカーリーグ戦第70回大会記念誌』（関東大学サッカー連盟、1996年9月）
- 『函館サッカー協会70年史』（函館サッカー協会、2000年11月）
- 『函館大学付属有斗高等学校創立70周年記念誌』（函館大学付属有斗高等学校、2009年2月）
- 五島祐治郎『大学サッカーの断層』（晃洋書房、2009年4月）
- 橋京平『Peace Hill—天狗と呼ばれた男 岡部平太物語』上・下（幻冬舎、2019年1月）
- 橋京平『直向きに勝つ近代コーチの祖・岡部平太』（忘羊社、2021年6月）
- 「大澤英雄 大学サッカー界の巨頭が来た道」上・中・下（『フットボール批評』第37号2022年9月、第38号2022年12月、第39号2023年3月、カンゼン）
- 「サッカー人生70年 国士館大理事長大澤英雄」『日刊スポーツ』（2022年9月～2024年3月）
- 『日本サッカー協会百年史』（公益財団法人日本サッカー協会、2023年3月）

## ○国士館発行物

- 『国士館大学新聞』各号（国士館大学、1957年1月～）
- 『国士館大学体育学部30年誌』（国士館大学体育学部、1987年11月）
- 『国士館大学教員組合20年史』（国士館大学教員組合、1993年12月）
- 『国士館大学同窓会20年誌』（国士館大学同窓会事務局、1995年5月）
- 『メモリアル40』（国士館大学体育学部、1998年10月）
- 天羽敬祐「スポーツ医科学科の誕生 その生まれ出る苦しみ」（『体育・スポーツ科学』第7号、国士館大学体育・スポーツ科学学会、2007年3月）
- 『国士館大学同窓会創立30周年記念誌』（国士館大学同窓会編集委員会、2004年5月）
- 『国士館大学体育学部50周年記念誌』（国士館大学体育学部、2008年11月）
- 『国士館大学体育学部60周年記念誌』（国士館大学体育学部、2018年11月）
- 『国士館百年史 史料編』下（学校法人国士館、2015年3月）
- 『国士館百年史 通史編』（学校法人国士館、2021年3月）

本文中に典拠を示した場合は略記した。

## 編集後記

故大澤英雄元理事長追悼本刊行委員会  
委員長（学校法人国士館常任理事）  
横沢 民男

本書は、学校法人国士館理事長として長年にわたり教育とスポーツの振興に尽力された大澤英雄先生の功績と人となりを偲び、関係者一同の感謝と哀悼の意を込めて編集したものである。

1936（昭和11）年、北海道函館市に生まれた大澤先生は、国士館大学サッカー部の創設者として初代キャプテンを務め、卒業後は本学体育学部の助手として、その後は教授、学部長、学長、理事長と要職を歴任した。60年以上にわたり指導者として多くの人材を育成し、大学サッカー界において不動の地位を築いた。また、日本サッカー協会特任理事、全日本大学サッカー連盟理事長などを務め、育成年代の環境整備や大会創設にも尽力した。2019（令和元）年には旭日中綬章を受章し、2023年には日本サッカー殿堂入りを果たしている。

大澤先生は、負けず嫌いで妥協を許さぬ性格であり、常に高みを目指して挑戦を続けた。その姿勢は、指導の場においても一貫しており、厳しさの中にあたたかさを持ち、教え子たちに大きな影響を与えた。大澤先生が重んじた「義」の精神は、今も多くの人々の心に生き続けている。育てた選手や指導者は数知れず、彼らは今も日本サッカー界の各分野で活躍している。薫陶を受けた者たちが築く未来こそが、大澤先生の遺産である。

本書の編集にあたり、ご遺族をはじめ多くの方々から貴重な資料の提供、エピソードの寄稿、当時の思い出や出来事の情報提供など、あたたかいご協力を賜った。ここに記して、深く感謝の意を表するものである。

皆さまのご尽力があってこそ、本書は上梓できる運びとなった。本書が、大澤英雄先生への感謝と敬意の証として、末永く読み継がれることを願ってやまない。

---

## 窮地を楽しむ サッカーを育み国士館に生きて——大澤英雄伝

2026（令和8）年2月16日発行

---

編集 故大澤英雄元理事長追悼本刊行委員会

発行 学校法人国士館  
東京都世田谷区世田谷 4-28-1  
電話 03（5481）3111

印刷 株式会社 成文堂  
東京都新宿区西早稲田 1-9-38  
電話 03（3203）9201

---

ISBN 978-4-600-01658-6

